

第54回 札幌大会

1999/9/16

札幌南陵高等学校

南区藤野の高台に立つ、全道的にも珍しい鉄筋5階建ての校舎です。セミや鳥の声の響く、時にはエゾリスも姿を見せる緑豊かな自然環境と、閑静な住宅街の中で健康で落ち着いた学校生活を送ることができます。



■ 研究主題

「新教育課程移行に向けた理論的・実践的研究」

～変化に柔軟に対応し、広い視野に立つ数学教育を目指して～

■ 講習会

演題 「新学習指導要領のねらいとその要点」
～教育課程編成上の留意点と各地の取り組みの現況～

講師 吉田明史氏
(文部省初等中等教育局高等学校課教科調査官)

■ 研究授業

学年	授業者	生徒	単元名
1年	黒宮裕久	札幌藻岩高等学校	【数Ⅰ】個数の処理
1年	佐藤学	札幌南陵高等学校	【数A】等式の証明
2年	山添茂夫	札幌南陵高等学校	【数Ⅱ】指数関数
3年	山崎雅明	札幌真栄高等学校	【数C】2次曲線
3年	長倉伯幸	札幌南陵高等学校	【数Ⅲ】微分法

「いくつかの出会い」

桐蔭学園中等教育学校 長倉 伯幸（札幌大会高校部会事務局長）

北海道に初めて渡り、道立高校に勤務し始めた頃、十勝教育局の指導主事として赴任された真田清臣先生と出会い、数学を教える教師の資質と努力について学ぶ機会を得ました。その後、北海道教育研究所の研修では、講師の田村二郎先生から数学を教える上で背景のもつ重要性和系統性の大切さについて、薄暗い廊下の片隅で遅くまで熱く教わりました。

それから20年以上の歳月がたち、組織改正などでゆれていた北数教高等学校部会の事務局長として研究部の先生方と夜遅くまで議論をし、札幌・函館・釧路と行われた大会では各地区の先生方と一献しながら、数学談義をさせていただいたことが目に浮かびます。

3年目の釧路大会では、満を持して講演をお願いした志賀先生と一献した釧路の一夜から、私の桐蔭学園中等教育学校での勤務と志賀数学との関りが始まりました。

残念ながら、種々の事情から志賀先生は今年で桐蔭学園での数学教育から離れましたが、その教育理念は、著書や講演などを通して全国に深く静かに広がっています。

志賀数学では、「数学を教えること」は、生徒に教えること以上に、教える側の教師の取り組む姿勢の大切さを意味しています。ですから、志賀数学の教科書は生徒に対するものであると同時に、教える側が創作するための教える側の教科書でもあるのです。

首都圏の進学校から北海道の数学教育を見ると、自分がかつて所属していたことを誇りに思ういくつかのことが見えます。中には見えないものですが自信を持ってください。今、北海道の数学教育に取り組む多くの友人と北数教高等学校部会に集う会員の皆さん、数学を通して浪漫を語り合いましょう。

「研究授業の思い出」

札幌清田高校 黒宮 裕久（研究授業者）

第53回北数教札幌大会の運営事務の仕事をしていた時、来年の南陵高校での研究授業の話が出て、羽幌高校時代にお世話になった長倉先生（当時、南陵高校）に「クロちゃん、いま藻岩高校だよ。来年、研究授業たのむね。」と言われて、半分、冗談かなと思いながら、その場でひきうけてしまいました。しかし、翌年、1年生の担任となった私は、すっかり研究授業のことを忘れていました。（長倉先生ごめんなさい。）

正式に話がきて、ひきうけることになると、生徒は大喜び。「バスに乗って、他の学校で授業するなんて、遠足みたい。」そんな気楽な授業じゃないんだよと私は心の中で思いながら進度表を確認すると、独立の導入の部分と独立試行になっていました。

さて、実際の授業ですが、生徒はしっかり受け、同僚の菅原先生（藻岩高校）に協力してもらったにもかかわらず、自らのミスで失敗してしまいました。それは、独立という言葉をはっきりとわからせようと時間をとりすぎたことと、私自身が気負いすぎて、必要以上に力がはいつてしまったことが原因でした。教員になって13年目になるのに、こんな程度の授業しかできないのかと、後で反省しました。しかし、私にとってこの失敗はとても貴重な経験となりました。ちょっと慣れてきて、授業が雑になっていた私は、これ以降、初心に帰って、再び生徒の立場に立った授業をするようになったと今でも思っています。次回、研究授業をすることがあったら、リベンジすると決意しています。北数教に感謝？

■ 領域別分科会

			S^*
			i
		$+S$	

